第2部　コロナ禍の後の大学言語教育

特　集

転換期の大学言語教育

［論文］

パンデミックがもたらした言語教育イデオロギーの転換

セミオティック・アセンブレッジの視点から

尾辻恵美
おつじ・えみ

1.　はじめに：第四次産業革命：デジタル革命と日常言語生活

この論文を読み始めるにあたって、まず、この24時間の言語・文化活動を振り返ってみていただきたい。ニュースはどのような媒体で目にし、どのような内容であっただろうか。買い物はどのような形態で行い、友人・同僚・家族とのコミュニケーションではどのような媒体を使っただろうか。そして、「日本語」以外にどのようなことばに触れただろうか。機械翻訳を利用すれば、海外からのモノや情報やメディアに簡単にアクセスできる。ニュースも、10年前と今とでは、媒体だけでなく、その量も違う。インターネット、携帯電話、ツイッターを始めとするSNSを介して種々様々な国からの多言語をソースとするニュースに触れることができる。その一方、AIやアルゴリズムの発達により、「あちらから」勝手に情報はやってくるように一見便利になった反面、自分の思考や嗜好にあったものだけが次々とコンピュータ上に現れる「エコー・チェンバー現象」ともいわれる自分の世界の殻が強化され、外から遮断される危険性も秘めている。また、後で議論する倫理の問題もある。テクノロジーの発達はまさしく禍福糾纒であると言えよう。

このような日常生活におけるコミュニケーションや言語・意味生活ひとつを

とってもわかるように、世界は目覚ましいスピードで変化している。第四次産業革命と呼ばれるモノのインターネット（IoT）、ロボット工学、人工知能（AI）、バイオテクノロジーなどの技術革新がそれを助長していると言えよう。今や、私達の生活はテクノロジーや様々なデジタル・デバイスなしには成りたたない。Wee（2021: 8）は、最近の駐車場で、各階に何台分の空車のスペースがある、などという情報が提示されている例をあげ、それは人間が作ったプログラムであれ、計算してそれらの情報を発しているのは、AIであると述べている。AIの発展によりプログラム自体がプログラムを作成することもできるようになってきた。そのような中で、Weeはコミュニケーション活動というものをどのように理解したらいいのか、と問うている。多文化・多言語社会として知られているオーストラリアに住む筆者も、中国系の掃除代行業者とは携帯電話の翻訳アプリの助けを借りて対面・非対面のやりとりをしている。また、電車やバスの位置を携帯電話でチェックしながら行動している。このように、デジタル・トランフォーメーションが進んでいることが、自分の生活を振り返ってみることでもわかる。

『ことばと社会』23号の「パンデミックの社会言語学」の序論において、ハインリッヒと山下は、パンデミックにより、デジタル・トランスフォーメーションが加速され、それに伴いコミュニケーションの方法、コミュニケーションのパートナーの選択、コミュニケーションのプロセスに変容をもたらしたが、それだけではなく、コミュニケーションそのものの意味が大きく変化したと指摘している（ハインリッヒ・山下 2021）。さらに、「コミュニケーションを含む日常生活が、世界的な発展とネットワークの一部であるという認識は、これまで以上に強いものとなっている」(同前: 17）と述べている。

Pennycook & Otsuji（2019）は、昨今のデジタル・テクノロジーの急激な普及により、いままでとは違うタイプの時空間の絡み合い（エンタングルメント）が日常生活の一部となったと議論している。このように、世界は既にデジタル・テクノロジーの発展により空間、人、モノ、時間、ことばなどが複雑に絡みあっているが、コロナによりそれがますます顕著化されたと言えるであろう。Lo Bianco（2021）はテクノロジーの発展により、常に様々な時空間とつながっているようになったため、「今・ここ」、と「あの時・あそこ」といった海外を含め離れた場所、そして過去・未来の境界線も曖昧になってきていると

指摘し、さらには、このような様相の現在社会において、「伝統的」な形式でことばを理解したり、教えたりすることはできないと唱えている。この主張は、言語教育と日常の言語活動の間に大きなギャップが生まれていることを示唆している。

本稿はLo Biancoの主張にのっとり、(1）トランスリンガリズムの一環である日常の（多）言語活動に目を向けるメトロリンガリズムが援用する「セミオティック・アセンブレッジ」と「分散化されたことば（distributed language)」(Pennycook 2017b; Pennycook & Otsuji 2017, in press）という概念を紹介し、(2）それらがコロナ禍後のことばの教育を考えるのに有用であると議論するものである。

この二つの概念は、既存の「個別性（言語は数えられる固有のシステムである)」および「個人性（言語は個人の能力として所有されるものである)」に基づいて理解する言語観からの脱却を促し、ことばを時空間に分在しているモノ、人、様々な感覚（音、色、匂い)、言語資源など意味を形成するのに関与する様々な資源、さらにはそれらを取り巻く場所や街の政治、歴史、文化、社会構造が相まったものであると理解するものであり、ポスト・ヒューマニズム的な世界観に依拠している。本稿は、パンデミックによって「コミュニケーションそのものの意味が大きく変化した」(ハインリッヒ・山下 2021: 11）現在、言語教育イデオロギーの転換が必要であると提唱し、コロナ禍、そしてその後のことばの教育の可能性を、ポスト・ヒューマニズムの視点から探る。

2.　マルチリンガリズムからトランスリンガリズムへ

グローバル化やテクノロジーの発展による、人、モノ、思考などの移動が顕著化するに伴い、言語の多様性が無視できなくなっている。そのような風潮の中、国家、民族、言語が一対一に対応しているという考えが根底にある従来のマルチリンガリズムは近代国家主義的な言語イデオロギーに基づいているとし、そのような固定的なイデオロギーを脱却し、流動的で多様な言語使用に目を向けようという動きが生まれた。Polylingualism（Jørgensen, 2008)、Translanguaging（García & Li Wei, 2014)、Translingual practice